

# 稱讚

一九六号

二〇一九年四月一日発行

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三十五二四二二〇二五

FAX 〇三十五二四二二〇二六



撮影 ちとこ

初春の今月にして

気淑く風和ぎ

梅は鏡前の粉を披き

蘭は珮後の香を薫す

万葉集 より

この歌は、『万葉集』巻五の梅花の歌「三十二首」の序文として書かれたそうので、

「風が和らいでいる」のは春の訪れだけが理

由ではなく、西暦六六三年、日本は百済を助けるため、唐・新羅の連合軍と戦い、敗れました。国家存亡の危機が訪れ、国土防衛のため、遠くは東国からも多くの若者が

九州北部に防人として派遣されました。その防人の派遣が七三〇年に停止されたのは、国際情勢が変わり、外患が少なくなり、必要がなくなったからだそうです。滞在中の防人を太宰府が統括し、穏やかで文化豊かな宴会が催されたときに歌われたもの、だそうです。参考 麗澤大学教授八木

四月一日、新しい元号「令和」が発表されました。令「和」とは、大びとが美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ意味が込められている（安倍首相）とのことで、人災がひっきりなしに起こっています。それです。平成も内平かにしな外なる」 国内外、天地とも平和が達成される」との思いが込められていました。しい時代を迎え、改めて、世界平和を願うことか、この平成「三〇年」とです。

間、振り返ると世界中で天災人災がひっきりなしに起こります。教令「教勅」という言葉があります。仏教的には、仏さまの教えと解せるでしょう。また、親鸞聖人は、

「教令」 教勅」という言葉がありま

ておられます。 仏さまの教え（教令）を聞くと、自然

と和らぎの心がおこる」と掲示板に書いてみました。私のころは、どこまでも執わ

# 稱讚寺 春季彼岸会

日時 三月二四日 (廿) 十四時)

日程 一四〇〇 おつとめ

仏説阿弥陀經  
仏教讃歌 み仏は

一四 四〇 法話 (住職)

一五 四〇 茶話会

一六 三〇 恩徳讃

穏やかな春のお彼岸をお迎えしました。  
福井恒彰さん、藪田佳之さん、早崎光弘さん、細川研一さん、高橋八重子さん、田中悦子さん、川田原末廣さん・正明さん親子、中木原乃既子さんがご参拝くださいました。  
午後二時より 仏説阿弥陀經』を皆さんでおつとめして、み仏は」を歌いました。

み仏は」

み仏は 眼を閉じて

み名呼べば

明かに居ます 吾が前に  
明かに居ます 吾が前に



み仏は 独り嘆きて

み名呼べば

笑みて居ます 吾が胸に  
笑みて居ます 吾が胸に

み仏は 慕いまつりて

み名呼べば

包みて居ます 吾がいのち  
包みて居ます 吾がいのち

前日は、真昌寺・稱讚寺合同法話会」を鶴田義光先生をお招きして、ムーブ町屋で開催させていただきました。稱讚寺からは高橋八重子さん、安達光成さん、住職の姉が聴聞させていただきました。  
高橋さんは、引き続きのご聴聞でありました。

み仏は」の一番の歌詞に 眼を閉じて」さやかにいます」とあります。私は、そつと」のイメージがあつたのですが、明らかに」の意味があります。ご和讃の 遇斯光のゆゑなれば」であります。親鸞聖人は、このみひかり」と明らかに遭遇っておられたことなのだと思われませんが、私はなかなか、このみひかり」と思えないでいることでもあります。

二番の歌詞には、独り嘆きて」笑みてぞいます」と、阿弥陀さまは、悲しいときは、一緒に悲しんでくださっていることを、微笑み」で表わしてくださいとあります。

三番の歌詞には、慕いまつりて」 つつみ

私 の 心のち」そのものを丸ごと温かく包んでくださっていると云われるのです。私の心だけに居るのではない、私の人生そのものを包んでくださっておられると味わえるならば、これ以上の安心はないことでしょう。

このいづれも、み名呼べば」とあります。南無阿弥陀仏」と阿弥陀さまが呼んでおられると聞くと、見えないけれど、明らかに「まします」と味わっていただけるのではないのでしょうか。

鶴田先生のお話の中で、「自力 について、本来」自力」とは無いのだということを知らさ

れました。全ては「縁起」で成り立っているのに、私（我執）が私のはからいと思いついて、折ることだとおっしゃいました。例えば、私が指を折る動作にしても、私がやっている（自力）と思っっているが、実は、いろいろな縁があった、指が折れている。本日、ここに参拝したのは、私の一人働きではなく、様々な縁が結びついて、ここに集えたことであります。

『伝説阿弥陀經』には「西方十万億仏土」と説かれる。私たちが思う阿弥陀さまのお浄土は西方にあると明言されているわけです。何故、西方なのか？十方世界に数限りない仏さまがいらっしゃるのにです。『伝説阿弥陀經』の「六方段」には、東西南北・上下の世界に数限りない仏さまがいらっしゃり、どの方も「様に、必ずあなたは西方の阿弥陀さまにより救われます」と「南無阿弥陀仏」のお念仏を称讃しておられます。この物語は私に何を説いているのでしょうか。太陽が真東から登り真西に沈んでいく日が、春秋お彼岸のお中日であります。

太陽が東から登るとは、私がこの世界へ誕生したことを表し、太陽が西に沈むとは、私がこの世界から居なくなることを表していると思います。私が気づくことが気づくまいが、東から西にと人生を送っているのでしょうか。その長さは人まちまちですが、若いとき、青春を謳歌しているとき、若くても病気をしているとき、実感しているときは、南の方に居るのか、北の方に居るのか、もしかしたら、何かに打ち込み、成功して、達成感を感じているときは、上（有頂天）にいるのかもかもしれません。また、失敗したら下で落ち込んでいるのかもかもしれません。しかし、私がどういう状態、心

持ちであっても、そこには仏さまが居られ、私に「南無阿弥陀仏」と、大丈夫だよ、必ずあなたは阿弥陀さまによって、救われますとおっしゃっておられると言うことなのでしょう。

「西方」とは、「死」の方向であります。西」という象形文字は、鳥が自分の巣で、羽を休めている姿を表わしていると言われます。口の中に一本線を入れると「酉（トリ）」になります。この「一本線は枝を表わし、鳥が木の枝に居ることから、トリ」と読むわけですね。鳥が自分の巣で羽を休めている状態とは、私が自分の部屋でくつろいでいる状態です。つまり、「西」とは、「安心する」という意味があるのでしょうか。「西方浄土」とは、「安楽」とか「安養」とも表現されますので、「死」としか思えない私ですが、安らかな世界へ生まれたいことを説いておられるのでありましょう。

太陽が沈む様子を見ると、落ち着く、とか、穏やかな気持ちになります。人によっては、怖いとおっしゃった方もありました。暗くなるということ、逆に不安がつると思われていることですが、思うに、「今、救われる」とは、この先、どうなるかということが明らかにになると、どうあれ、お任せできる方が居られると思えることなのでしょう。

太陽が沈むことに戻りますが、沈む太陽を私（観）が観（み）ているのですが、実は太陽の方が、私を照らしている、太陽の方から、私に現れているのであります。『伝説観無量寿經』には、「目想観」が説かれる中、西方に沈む太陽を觀て、眼を閉じて、その様子を想像していくという修行が説かれています。最初は「觀る」という表現でしたが、いつの間にか「見る」に変

わっているのです。

遙か西方の浄土を私が思うということは、実は先にお浄土の方から私に現れてくださっているものでありましょう。今現にましまして法を説きたまう」と『伝説阿弥陀經』に説かれているのは、阿弥陀さまは、西方浄土に留まって、そこで法を説いているというのではなく、今、現に」とは、今、この私の世界に來たり現れて、仏法を説いておられるのですよとおっしゃっておられることを表わしているのです。

金子大栄師が「浄土への道は 浄土から開かれたものである」とおっしゃられました。

これらのお経の言葉は全て「方便」です。「嘘も方便」と言いますが、「有相も方便」が正しいのです。「有相も」と「も」とありますから、真理が、姿・形ともなつて、私たちに分かるように顕れ示してくださり、言葉ともなつて、真理を示し、真理の方向へ誘ってくださっている。その阿弥陀さまのはたらきを「方便」と言うのであります。

また、阿弥陀さまを「智慧」「慈悲」で表現されます。私たちが起こすような、思うような「智慧・慈悲ではないので、大智慧」「大慈悲」とも言われます。これも阿弥陀さまの方便なのです。

阿弥陀さまの慈悲とは、「一言で言えば 撰取不捨の真言」、智慧とは、「超世希有の正法」と言うことではないでしょうか。そこに「聞思して遅慮することなかれ」「本願のいわれを聞きひらき、疑いためらつてはならない」と言われます。

「聞思」とは、どういうことでしょうか？

親鸞聖人は、『教行信証』の信文類で、  
信にまた二種あり。一つには聞より生ず  
二つには思より生ず」とおっしゃっております。  
「聞より生ず」とは、言葉を聞くだけ  
で、そのいわれを知らない信心」。思よ  
り生ず」とは、いわれを十分ききわけて信  
ずる信心」（『注釈版聖典』より）と解説  
されています。親鸞聖人は引き続いて「この  
人の信心、聞よりして生じて、思より生ぜ  
ず。このゆゑに名づけて信不具足とす。ま  
た二種あり。一つには道ありと信ず、二つ  
には得者を信ず。この人の信心、ただ道あ  
りと信じて、すべて得道の人ありと信ぜら  
ん。これを名づけて信不具足とす」とお  
っしゃっております。

仏さまのお話を「聴聞」していると言いな  
がら、誰のためにご本願を建て、誰を救わ  
んとしておられるのかを聞き尽くしていくこ  
となのでしょうか。しかし、私は、同じ話だと  
聞き飽きたり、聞いたことを自分の思い込み  
で分別しているのでしょうか。

「聞思」とは、難しいことのようにありま  
すが、  
「遅慮することなかれ」と言うところ  
には、  
「実感できなくても、この阿弥陀の心  
を思い留めておいてくれよ」とおっしゃって  
くださっているのかなと思うところです。

ただ、親鸞聖人が邪心と戒められた「聞  
不具足」なのかもしれないことを念頭におい  
ておかなければならないことでしょう。

### 鶴田義光先生による「生きる仏教」

「安心して迷ってゆけばいい」

「ただ念仏」という生き方

日時 三月二十三日（土）10時～19時（3席）  
会場 公一フ町屋」 四階 会議室A

「わかるに「経」に「聞」といふは、衆生、  
仏願の生起本末を聞きて疑心あること  
なし、これを聞といふなり」

鶴田先生のお話を初めて聴かせていただきま  
した。

先生は、お東の名古屋別院で毎週ご講義なさ  
れ、この日も「愚深会」の方々が名古屋からご



聴聞に来ておられ  
ました。その熱心  
さに圧倒されまし  
た。先生も「法話  
会」ではない、  
「聞法会」だと  
おっしゃっておられ  
ました。

先生は、  
「回  
心」ということを  
強調されておられ  
ました。



それなのに、  
聞法して、ど  
こまでも疑うこ  
とが大事」とも  
おっしゃられま  
した。

矛盾するよう  
にも思えたので  
すが、後で先生  
の著書「歎異抄  
後述・聞書  
（一）」を読み  
ますと、  
「疑  
う」とは阿弥陀  
さまのお心を

「疑う ことではなく、私自身のところを」疑  
え」とおっしゃっておられたのだと気づきまし  
た。「信じていると思っているところ も」疑っ  
ていると思っているところ も疑いなさいと。

やはり「疑心あることなし」とは、私のところ  
ではなく、阿弥陀さまのお心は「疑蓋雑わるこ  
となし」ということかと思えます。

また、鶴田先生が師と仰がれるお一人の安田  
理深先生の「念仏者の実践は聞法である」との  
お言葉から、これまで「聞法 は実践とは思え  
ずにおりましたし、私の「聴聞 は「実践」と  
はかけ離れたものだったのでしよう。

先生の歯に衣着せぬお話に、ご出席された  
方々のお顔が生き生きとしておられたような感  
じを受けました。

# ご文章を味わう

蓮如上人がお書きになった『御文章』を浅井成海先生の現代語訳から味わってみたいと思います

## いまの世章 四帖第十通

今いまの世よにあらん女人にょにんは・みなみなこころを一つひとにして・阿弥陀如来あみだにょらいをふかくたのみたてまつるべし、そのほかには・いずれの法ほうを信しんずとも・後生ごしょうのたすかるということ・ゆめゆめあるべからずとおもうべし、されば、弥陀みだをばなにとようにたのみ・また後生ごしょうをばなにとねがうべきぞというに、なにのわずらいもなく・ただ一心いっしんに弥陀みだをたのみ・後生ごしょうたすけたまえとふかくたのみもうさん人ひとをば、かならず御おんたすけたらんことは・さらさらつゆほども疑うたがあるべからざるものなり、このうえには・はやしかと御おんたすけあるべきことありがたさよとおもいて、仏恩報謝ぶつおんほうしゃのために・念仏申ねんぶつまうすべきばかりなり、あなかしこ あなかしこ

八十三歳 御判

## 今の時代の女性に信を勧める

今の時代に生きる女性は、みな心を一つにして、阿弥陀如来に深くお従いすべきです。そのほかには、どんな教えを信じて、今を生きぬき永遠の命をいたたくといふことは、まったくくないと思ってください。

それでは、阿弥陀さまにどのように従い、また、今を生きぬき永遠の命をいたたくことをどのように願うべきかといえは、何の面倒なこともなく、ただ、ふたごころなく阿弥陀さまに従って、み仏のはたらきで今を生きぬき永遠の命をいたたくまじと深くおまかせするばかりです。そのような人をおたすけくださることは、決してつゆほども疑いありません。

このうえには、最早、確かにおたすけくださることに、なんとありがたいこと」と思い、仏のご恩にお応えし感謝するために、ただただお念仏すべきです。

あなかしこ、あなかしこ

八十三歳 御判

蓮如上人の『御文章』の中、女性こそ「救われる」という内容のご文は、二十通ほど見受けられます。今の世」という連署上人の時代背景としては、女性の立場は、五障・三従」のレッテルが張られ、民

間でも女性蔑視がまかり通っていました。

現代においては、<sup>\*</sup>「GBT」セクシャル・マイノリティ(性的少数者)のこともあり、一概に女性と男性とはっきり区切ることもできません。とは言え、現代でもDV等の問題を思うと、男性優位の考えは拭い去ることはできません。

蓮如上人のご文章には、五障・三従の女人」と併せて、五逆十悪の悪人」の救いのことも述べられておられます。女人だけではなく、当時、悪人」として、社会において、救われたい方に眼を向けられていたのでありましょう。今で言うと、社会的弱者」と言うことでもあります。社会的弱者」に見るような表現になってしましますが、そうあってはならないと思います。

蓮如上人が「五障・三従」を度々お使いになられるのは、上人が女性蔑視の考えがあったと言うことではなく、社会的に蔑まされてきた方こそ、救われるべきだと思われていたからでしょう。

女性は救われたい」と仏教でも説かれていたかと言うと、そうではなく、説いていると私たちが誤解してきた事実があるということなのでしょう。

浄土真宗注釈版聖典」の 女人・根

欠・五障三従」の解説には次のように解説されています。

## 女人・根欠・五障三従

浄土論』などには、浄土は平等なさりの世界であって、譏嫌の名なし、女人および根欠、二乗の種」は存在しないと説かれている。ここでいわれる譏嫌とは、成仏できないものとして嫌われることを意味していたが、『論註』には譏嫌名に世間的なそしりの意味も含まれている。それは当時の差別された女性や障がい者の救済を説くために、浄土にはこのような差別の実体もなく、女人や根欠という差別的な名さえもない絶対平等の世界であるとあらわされたものである。その聖典が成立した当時の社会にあつては、女人や根欠を卑しいものとみる社会通念が支配的であつた。そうした中であつて仏国の平等性をあらわすことによって、差別の社会通念を破り、女人や根欠に救いをもたらすとした教説である。二乗とは声聞、縁覚という小乗の行者のことであつて、仏になれないものとされた。根欠とは、『論註』では、眼、耳、舌等の諸器官が不自由な人のこととみられている。

婦人は幼にしてはその父に、若き時はその夫に、夫死たる時はその子息に従うべし。婦人は決して独立を享受すべからず」といったもので、仏教教団もこの思想に影響されて五障説が出、五障三従の教説が成立したのである。しかし大乘仏教は、女性は仏になれないと説く教えに対して、『法華経』や『無量寿経』にあるように変成男子の教えが説かれた。すなわち『法華経』の『堤婆品』には、女人は五障あつて成仏できないであろうとする舍利弗の疑問に対して、八歳の童女が女身を転じて男身となり成仏していくことが説かれている。また『大阿彌陀経』の第二願や、『無量寿経』の第三十五願には、本願力によつて女身を転じて往生成仏せしめようと誓われている。このように女性は一度男性になつてから悟りを開くというのは、父健制社会のなかでできびしき差別にさらされ、悟りは開けないとされた女性にも成仏できるという道を開かれたのである。さらにすすんで、男女老少をえらばず」といい、阿彌陀如来の本願は男性も女性もまったく差別なく、ひとしく救済されるとあらわされたのである。

女性を罪深く、不浄で、男性よりも罪の深いものであるとする考えは、現代の一般社会にも浸透しているが、これは男性中心の考え方であり、女性差別の思想であるといえよう。また『女人・聾・盲』などの言葉が譬喩としてよく使われるが、その多くは悪い意味で使われている。たとえば、『論註』(土)に、浄土にはそしり、きらわれるような名さえもないということをあらわすのに、大の諂曲なると、あるいはまた懦弱なるを、譏りて女人といふがごとし。また眼明なりといへども事を識らざる

を、譏りて盲人といふがごとし。また耳聴くなるといへども、義を聴きて解らざるを、譏りて聾人といふがごとし。中略)かくのごときから、根ありと不足せりといへども譏嫌の名あり」といい、世間では、女性や、障がい者のすがたをそしりきらうことの譬喩として用いているといわれるものなどがそれである。このように女性や心身に障がいのある者をそしりの言葉として用いることは、今もなお行われているが、たとえ譬喩としてであれ、女性や心身に障がいをもつ人を差別することは大きな誤りである。

※LGBT エル・ジー・ビー・ティー)

L Lesbian」レズビアン」女性同性愛者

G Gay」ゲイ」男性同性愛者

B Bisexual」バイセクシュアル」両性愛者

T Transgender」トランスジェンダー」

出生時に診断された性と自認する性の不一致)の頭文字をとり、セクシュアル・マイノリティ」性的少数者の一部の人びとを指した総称。現在、学校・職場での人権的尊重が取り組まれている。

こういう取り組みがなされている一方、教育現場におけるいじめ・暴力、職場における多様なハラメント、家庭における虐待がますます深刻化している私たちの社会であります。

他人事とは決して出来ないことを肝に銘じ、全ての方に 阿彌陀さまのご本願がまします」と思い続けて参りたいと思います。

# 歎異抄後述・聞書 (一)』

鶴田義光氏著

一、浄土真宗では助かることを「往生」という

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。

これは『歎異抄』第一章の冒頭のお言葉ですが、ここに「往生をばとぐるなり」と出て来ます。浄土真宗においては助かる、救済ということとを、「往生」「往生浄土」「往生極楽」という言葉で表現します。浄土へ往き生まれると。浄土とは何か。淨い土とは何か。まあ我々は不浄ですね。「浄土」に対して我々の世界を「穢土」と言う。また「娑婆」「不浄の世界」「穢れた世界」「五濁悪世」とも言います。何によつて穢れているかという、自分の我執・分別によつて穢れている。我執・分別によつて思い描いた世界、自分の我執・分別を立場として思い描いた世界、それを「穢土」とか「娑婆」とか言うわけですね。それに体して、我執・分別が破られた世界、本来の世界を「浄土」と言います。分別のもとに我執があります。我執・分別が破られた本来の世界を「浄土」と言います。もっと言えば「本来のいのちの世界」を「浄土」と言う。我々が見ている世界は、全

部、我々の我執・分別で色づけされ、勝手に思い描かれた、そらごとたわごとの世界です。そういう「娑婆」「穢土」、そこにおるとやっぱりしんどいわけですね。本来の世界へ帰りたいわけですよ。本来の世界に帰ることを「往生浄土」というわけですよ。「往生浄土」とは、本来のいのちの世界へ帰ることです。本来のいのちの世界は、今ここにあるわけですが、誰も知らず、見失っているわけですよ。

「救済」を浄土真宗では「往生」という。「往生」とは「本来のいのちの世界」へ帰ることです。それが「助かる」ということです。簡単に言えばそういうことです。それだけなんです。本来の世界へ帰る。いまたかつて出遇ったことのない自分自身に出遇うんです。もとからあるんですけどね。目の前にあるんですけどね。あるんですよ。あるんですけど、我々は、うろろして、外に探してるわけです。なかなか自分の足元は見えませんか、それで面倒なんですけど。

「往生」という言葉は大事な言葉です。第二章には、命懸けで京都の親鸞をたずねて行かれた同行に対して、  
おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり。

と親鸞は言われる。「往生極楽のみちをといきかんがため」に命懸けで来たんだと。我々が願っているのは「往生極楽」・・・、このこと

一つなんです。何のために仏法聞くのか、本来の自己に出遇うためです。本来のいのちの世界を、「本来の自己」と言ってもいいわけですよ。本来の自己に出遇うために生まれてきたんですよ。本来の自己に出遇うために迷っているわけですね。「往生」ということが我々の一番の課題です。

問) 浄土とは何か。

答) 浄土とは、我執・分別が破られた本来の世界のことである。

問) 同義語) 浄土、我執・分別が破られた世界、本来の世界、本来のいのちの世界、本来の自己

問) 穢土とは何か。

答) 我執・分別によつて思い描いた世界、自分の我執・分別を立場として思い描いた世界のことである。

問) 同義語) 穢土、娑婆、不浄の世界、穢れた世界、五濁悪世

問) 往生とは何か。

答) 往生とは、本来の世界へ帰ることである

問) 同義語) 往生、往生浄土、往生極楽、正定聚に住す、不退転に住す、成仏に至る道、念仏の

一道に目覚めた、人類を信じることができるとなる、必至滅度という確信を得る、必ず成仏する身となる、信心を賜る、助かる、救済

問) 何のために生まれて来たのか。

答) 本来の自己に出遇うために生まれて来た

問) なぜ我々は迷っているのか。

答) 本来の自己に出遇うために迷っている

※ 「往生」を「現世」で説く場合と、「来世」で説く場合の二義があることにご注意ください。(北村)

# 稱讚寺 行事予定

## 二〇一九年四月の行事予定



六日(土) のんのん法話会 休座  
東組連研のため)

七日(日) 日曜礼拝 午前九時

四日(日) 日曜礼拝 午前九時

六日(火) のんのん法話会 午後一時  
立教開宗記念・花まつり

二日(日) 日曜礼拝 午前九時

二六日(金) のんのん法話会 午後一時

## 二〇一九年 五月の行事予定

六日(月) のんのん法話会 午後二時

二日(日) 日曜礼拝 午前九時

六日(木) のんのん法話会 午後二時

九日(日) 日曜礼拝 午前九時

二二日(月) 築地本願寺宗祖降誕会参拝

二六日(日) 日曜礼拝 午前九時  
のんのん法話会 午後二時  
親鸞聖人降誕記念

## 二〇一九年 六月の行事予定

二日(日) 日曜礼拝 午前九時

六日(木) のんのん法話会 午後二時

九日(日) 日曜礼拝 午前九時

六日(日) 日曜礼拝 午前九時  
のんのん法話会 午後二時

二三日(日) 日曜礼拝 休座

二六日(水) のんのん法話会 午後二時

三〇日(日) 日曜礼拝 午前九時

## 二〇一九年 四月 法務・布教・出向予定

三日(水) 坂根家月忌参り 九時半

五日(金) 金山家一周忌 十一時

七日(日)

九日(火) 布教所OB会 十六時

二二日(日) 東組例会 十八時

二四日(水) ビハール本願寺一〇周年

二七日(土) 早島理先生の講義

## 二〇一九年度 稱讚寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会  
代表 北村 信也

口座 普通 6176051

## 宗門総合振興計画「懇志の」案内

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会  
代表 北村 信也

口座 普通 6176051

## 出会いには

かみなら いみ  
必ず意味がある

二〇一九年 心のともしび「四月カレンダー」より